

武生高校の探究活動の実態

武生高校 探究文科 3年

1 abstract

The title of our topic is Takefu High School and its Education in the Future. The purpose of our presentation is to investigate the present situation of research activities in Takefu High School. We decided on this research because we wonder whether there are any good effects or not through research activities. Our methods are interviewing the teachers and questionnaire to the students. The result shows us that there are some advantages and disadvantages in research activities. The advantages are deep thinking and good at talking.

Disadvantages are too many students for teachers and having to use break time and after school. In conclusion, we think that recent education is too enquiry in some ways, so we think we should incorporate the benefits of old education.

2 要旨

研究の目的は、武生高校における探究活動の現状を調査することだ。研究活動を通して、良い効果があるのか気になり、この研究を行うことにした。方法は、武生高校内の先生方へのインタビューと生徒へのアンケートである。その結果、探究活動にはメリットとデメリットがあることがわかった。メリットは、深い思考を養える、発表などの話がうまくなるなどである。デメリットは、教師一人あたりの生徒数が多すぎて教師が大変なこと、休憩時間や放課後を探究活動に費やさなければならないことである。結論として、最近の教育は探究活動に力を入れすぎているところがあるので、昔の教育の良さを取り入れるべきだと考える。

3 はじめに

動機

近年、日本政府の推奨により全国的に探究活動が広まっている。それは武生高校でも例外ではなく、探究科創設を始めとして様々な形で探究活動が展開されている。そこで今普及している探究活動がどのような効果があるのか、どのように教育の方針が変わって行くのか疑問に思ったためこの研究を遂行した。

仮説

生徒は昔の受動的で知識重視の教育を選び、教師は今の探究的で思考重視の教育を選び、生徒と教員の間で意見の食い違いが出る。

4 実験方法

①武生高校の一、二年生にアンケートをとった。質問内容は、神戸大学教授の林創教授の

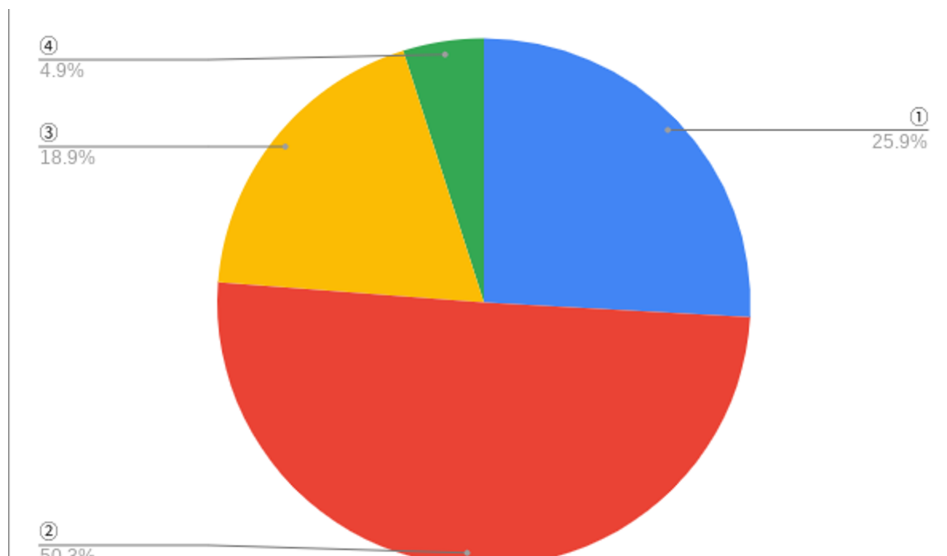
「探究の力を育む課題研究」を参考に「意欲的に取り組んでいるか」「知識が深まったか」「勉強と研究の違いがわかったか」「進路選択に役立ったか」「満足できる研究か」である。

②国語科の先生にインタビューをした。国語が一番話し合い活動があり探究活動が進んでいると判断したため国語を選んだ。

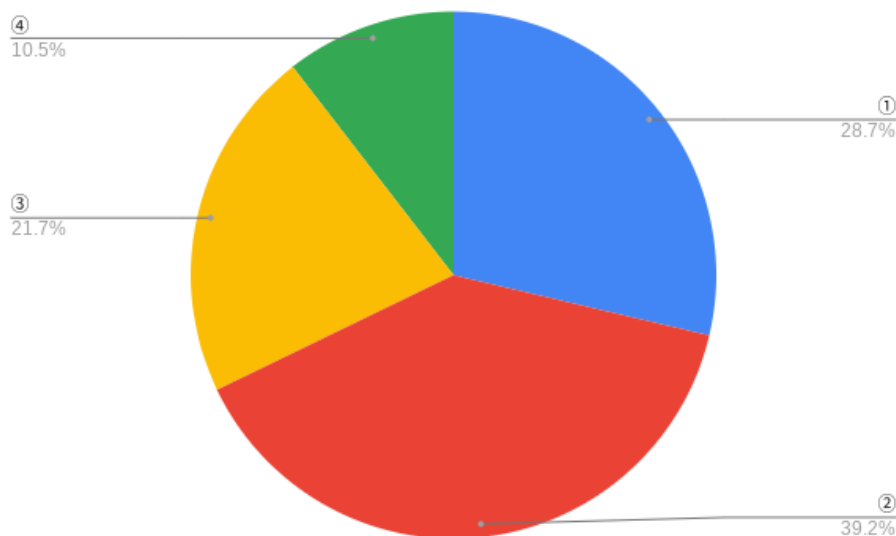
5結果

①の結果はいい点では、思考力の向上、主体的にできる、プレゼンの練習になる、などが挙げられた。悪い点では、勉強のほうが大事、クオリティが低い、放課後や休み時間などを探究活動に費やさなければならない、などが挙げられた。

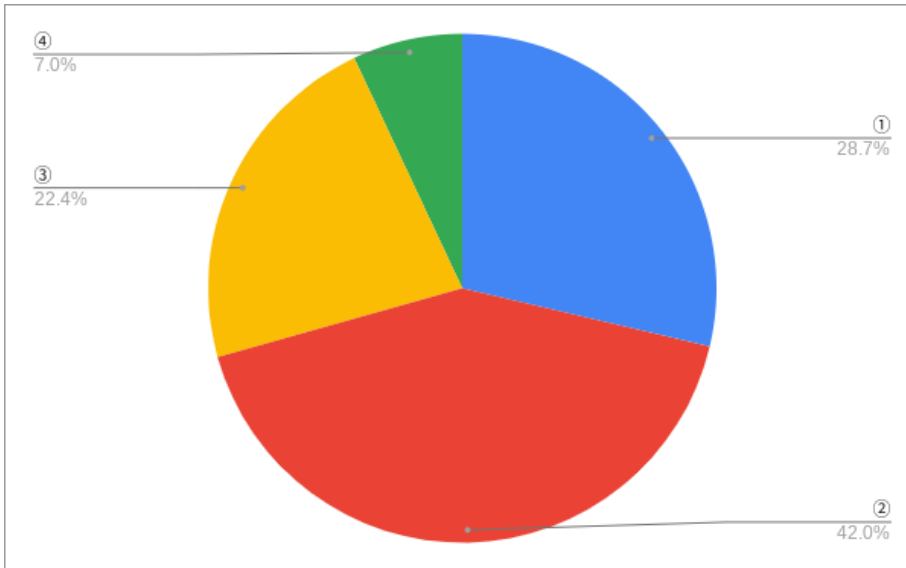
i 意欲的に取り組んでいるか



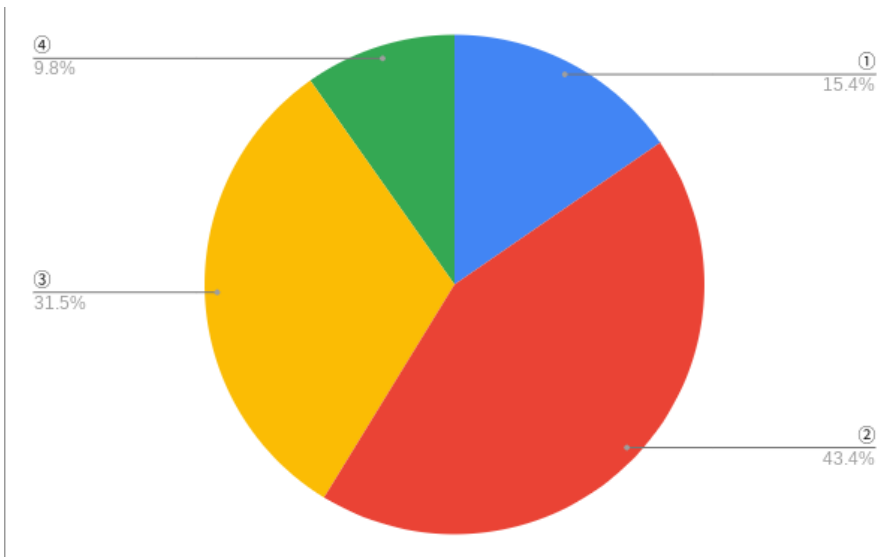
ii 知識が深まったか



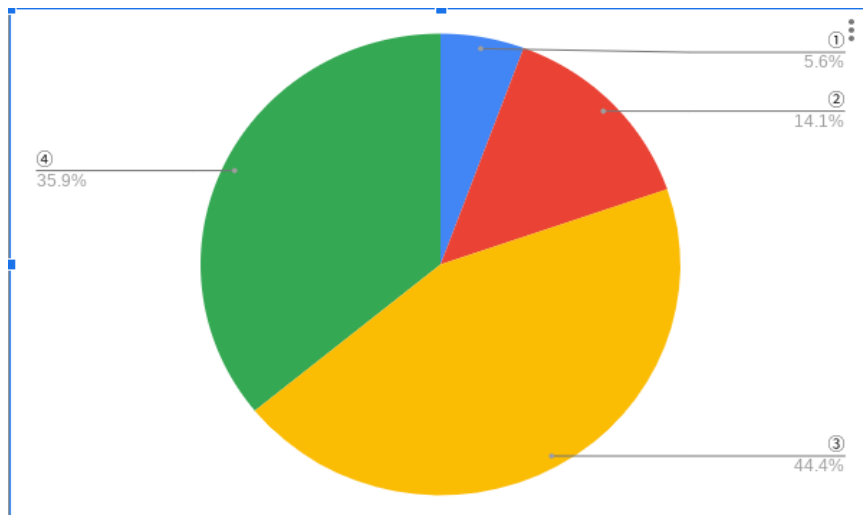
iii 勉強と研究の違いがわかったか



iv 進路選択に役立ったか



v 満足できる研究かどうか



青:とてもそう思う 赤:そう思う 黄:あまりそう思わない 緑:そう思わない

②の結果では、現代の課題は生徒の数に対して教師の数が少ないことが挙げられた。先生によると、38人の生徒を一人で担当することは不可能だという。生徒が多いと、先生だけでは生徒の詳細を知ることができない。それが原因の一つとなって探究活動に学生が不満を持っている。

また近年、探究活動により暗記が軽視されるようになり、思考力が重要視されている。それに対して、先生は、最近の学生は単純な作業をするのを疑問に思いすぎていると言った。一つのことに集中しすぎると、知識は深まるが範囲が狭くなってしまう。また、授業中に生徒が回答する機会が減ったために、アウトプットに偏りが生じている可能性もある。

さらに先生側の事情としては、話し合いなどで出た生徒の意見をまとめ、それに応じて次の授業に活かしたりするなど、授業以外の仕事量が増えた、その反対に授業中は生徒への質問は大きな問を一つするだけになったので負担が減ったという声もあった。

探究活動と直接の関係はないかもしれないが、絵を書くことが上手な生徒が増えたというのもあった。

6 考察

1. 先生へのインタビューより生徒の人数に対して、先生の数が少なすぎるのではないかという指摘が挙げられた。グループになって活動したり、個人の意見を書いたりするなどが原因で先生たちの負担は大きくなっていると考えられる。また生徒たちはそれぞれ違う分野について研究、調査を行なっているため、先生たちは自分の専門である部分以外にも生徒にアドバイスする必要がある。そういったことで、生徒に不十分な対応や助言をせざるを得ない場面が生じ、結果として生徒の不満足につながってしまうのではないだろうか。

2. 先生へのインタビューより生徒の暗記能力が低下しているのではないかという指摘もあった。原因として考えられるのは、最近の探究活動への過剰な積極性が考えられる。探究活動に固執するあまり、暗記が疎かになっているということだ。具体的には授業中の先生からの質問の減少である。近年では、一つの大きな問だけを生徒に投げかけ、それについてを一時間の授業で考えを深めるという形態をとっているようだ。そうするためには、基本的な知識をある程度すっ飛ばして授業するしかない。すると、知識が広がりを持たなくなってしまうがちである。

7 結論

現在探究活動はかなり盛んに行われ過ぎていると考える。すべての分野で間違いなく大切な知識という昔の教育で重要とされてきたものを取り入れていくべきである。

8.今後の課題

本来教育というものには、即効性が薄いため今回のような短期間の研究では、明らかな結果が得られにくいと考えられる。そのためもっと長期的に研究できる方法を見つけたい。また今回の研究では国語の教員にしか取ってないため、他の教科についても調べられると面白い。

9.参考文献

・林創 2019年「探究の力を育む課題研究」 学事出版